

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 西田桐子

本博士論文「戦後日本文学の〈黒人〉——文学／芸術／政治運動と黒人表象（1945-1961）」は、第二次世界大戦敗戦直後の占領期を経て1961年に至るまでの、現代日本文学における黒人表象を多角的に論じた（原稿用紙換算で千枚を超える）浩瀚な研究である。2000年代から日本においても「人種」概念の再検討が精力的に行われており、日本における黒人表象については、その差別的な人種観を指摘する先行研究がすでに存在する。しかし戦後日本の固有の文脈に即し、然るべき一次資料を網羅した上で、黒人表象史を構築するような研究は意外にも存在しておらず、本論はその大きな空隙を埋める貴重な仕事と高く評価できる。

西田氏は本論のアプローチの理論的基盤を、トニ・モリスンの著書(*Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*, 1992) に拠っている。すなわち白人による黒人表象の「地図」を描いたモリソン同様、戦後日本文学における黒人表象の具体的データや全体的アウトライン、歴史的変遷や個別作品の評価を含んだ「地図」を構築することを第一の目的としている。本博士論文別冊資料集に収められた「〈黒人〉小説年表（1945-1961年）」は、わずか三頁の一覧表ながら、然るべき見識をもった悉皆調査によって収集された一次資料データとなっており、ここから、本論で論じられるべき対象作品と区切るべき画期が抽出された。西田氏に拠ればその画期とは、1945年（敗戦）、1952年（占領終結）、そして1961年（『黒人文学全集』の刊行とアジア・アフリカ作家会議東京大会の開催）である。とりわけ1952年と1961年は先の調査によって明らかになった「黒人表象の地殻変動」であったという。それらの画期がなぜ、そしていかにもたらされたのかという問いに導かれる形で本論は進行していく。

本博士論文は、全四部、七章（および序章、終章）から構成されており、別冊資料集が付帯されている。序章では先行研究の紹介と本論との相違、時代区分とテーマの画定、「黒人」や「アフリカンアメリカン」等の用語規定や表記法、論文全体の構成と各章の要旨について、明快にまとめられる。本博士論文の構成上の大きな特徴としては、全体のアウトラインを描き出すと同時に、標準的な「類型」を逸脱して豊かな文学的想像力を示す個別作品を精緻に分析するセクションを、各部の最後に置いている点である。これによって本論は、文学研究としての深みと魅力を増していると言える。

第一部「政治運動と〈黒人〉——占領される日本人／抵抗する黒人」では、占領期から講和期にかけての黒人表象に着目している。検閲と黒人表象の関係を明らかにした上で、社会主義との親和性を色濃くもつ平和運動を中心に、反米的政治運動への文学者の参与と黒人表象の関わりについて探究している。第一章では、占領政策が黒人表象に与えた影響、とりわけ文芸誌『新日本文学』の調査をもとに、1951年頃に生じたピークスキル事件と黒人表象の関わりに光を当てる。この事件によって日本の文学者は、芸術家による政治運動の先駆者として黒人をみなすようになっていくのである。その文脈から、西野辰吉「米系日人」（1952）の黒人表象を検討する。

第二部「文学／芸術運動と〈黒人〉——移入され展開する黒人イメージ」では、主に芸術運動において、外国文化の移入が、戦後日本文学の黒人表象に与えた影響に焦点を当てる。第二章では、「黒人文学」受容とその影響を、特に詩の分野に着目し明らかにする。その意味において記念碑的存在となったのが、『黒人文学全集』の刊行（1961-1963年）である。この全集の編集者でもあった木島始が、革命への志向を内包しながら、黒人文学の移入にいかに関与したかがあぶり出される。筆者はさらに寺山修司に着目し、ラングストン・ヒューズの翻訳をめぐる寺山の詩論を分析することにより、木島による「黒人文学」の翻訳が、寺山を含めて詩壇に与えた大きな影響について語る。同時に、昭和三十年代のジャズやブルースといった「黒人音楽」の寺山への影響も明らかにされた。木島と寺山をめぐる第二章はその目の付け所と充実した論の展開で、審査会で高い評価が与えられた。第三章では、先行研究ではほぼ言及されることのなかった、西ヨーロッパ由来の主にアフリカの黒人

に対するイメージに着目する。さらにその影響が、1950年代後半頃からのジャズブームへも及ぶことが論じられる。これは、日本の黒人イメージにおける、アフリカ的なものとアフリカンアメリカン的なものをつなぐことを意味する。第一に、岡本太郎の「黒人芸術 (art nègre)」について。第二に、岡本と花田清輝の共闘関係を軸にして発展した戦後前衛芸術運動の中で生成されていった黒人イメージについて検討する。そしてこれらの論述を踏まえた上で、第二部最終部では、倉橋由美子の1960年代前半の小説に描かれるジャズミュージシャンと(黒人の)同性愛行為という二つの表象に着目する。倉橋は、女であり芸術家であること存在論的探究と、ジャン・ジュネやボーヴォワールをはじめとするフランス文化受容によって、いわゆる「類型」からは逸脱する奇妙な(クィアな)黒人表象を生みだしたことが、精緻に分析されている。

第三部「《内なる「黒人」》 / 《内なる黒人》 / 「黒い日本人」——「黒人混血児」と「黒人兵」の表象を巡って」では、雑誌や映画というメディアや、ルポルタージュおよび「記録芸術」といった芸術ジャンルを横断しながら、そこに表れる「文学的想像力」を探る。第四章では1950年代の雑誌『婦人公論』を中心に、野上弥生子、パール・バック、ジョセフィン・ベイカー、沢田美喜、高崎節子など、主に女性による「黒人混血児」を巡る諸言説を検討する。次に、獅子文六の新聞小説「やつさもつさ」とその映画化に着目し、映画の脚本を原作と比べることによって、メディアによる相違や、講和期を通して日本に定着した「黒人混血児」のステレオタイプを明らかにする。それを踏まえ、杉啓之による小説「ペーパー・ムーン」(1958)と、日本社会に大きな衝撃を与えた映画「キクとイサム」(1959)を検討することで、「黒人混血児」表象の典型と転換を探る。第五章では、1950年代の「黒人兵」表象の傾向を明らかにするために、小島信夫「アメリカンスクール」(1954)と堀田善衛「曇り日」(1955)、吉野壮児「断層」(1958)と小林勝「その席がない」(1960)を読み解いていく。そして第二部の最終に置かれる第六章では、1958年、時を同じくして発表された大江健三郎「飼育」と松本清張「黒地の絵」という、日本文学における黒人表象史上最も有名な二作品を、新たな視点から読み直す。特に大江の「飼育」論は、やはり「類型」からは逸脱する黒人表象の様相が、小説細部のスリリングな分析によって記述されている。

第四部は、アジア・アフリカ作家会議東京大会(以降、AA東京大会)が取り上げられる。AA東京大会は、日本文学史上初めのアフリカとの出会いであり、これによって、日本の文学者が抱く黒人イメージは転機を迎える。第七章ではAA東京大会の概要を示し、その開催の経緯を明らかにすることで、文学者の安保闘争への参与と戦争責任という二つの要素が、東京大会の開催を強力に後押ししたことを示す。日本の文学者たちは、AA東京大会に連帯と共闘の夢を見るが、実際の会議に臨んだ彼らは、さまざまな齟齬に直面し、戸惑うことになる。多くの日本の文学者は、この会議で初めてアフリカ(人)と対峙し、無知を自覚し、それによって、アフリカ理解への扉が開かれるとともに、戦後日本文学における黒人表象にも大きな転換がもたらされたのである。

審査会では一致して、戦後文学における黒人表象を論ずるにあたり、膨大な一次資料の探索を踏破して、読者を納得させる「地図」を描き切った地道な努力と共に、文学研究の枠を超えて、政治的文学運動、翻訳や出版という営為、文学者会議など、あえて文学の「場」を最大限に拡大して同時代の「文脈」をあぶり出そうとした戦略が成功したことが高く評価された。また、今後然るべき形で公刊されるべき仕事であることが確認された上で、全体的な誤字脱字の指摘の他、1950年代の国民文学論争との関係に関する記述の充実、大江健三郎と花田清輝との関係について、「アンクルトムの小屋」の翻訳状況、原発と黒人表象に関する問題など、様々な事実や興味深い将来的課題が、審査委員より提示された。しかしこれらの指摘は、提出論文の高い達成度から導き出された学問的議論であり、あくまでも今後の研究の進展と論文公表の際のさらなる希望として提示され、本論文の価値を損なうものではないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。